

小谷部全助 文献抄

〜反骨の登山家の実像を追う〜

砂田 定夫（日本山岳会会員）



小谷部全助（生田正子氏提供）

【編集部より】

以下に掲載する文は、『山岳文化』第7号（2007年）及び第8号（2008年）に発表された砂田定夫氏の小谷部全助先輩についての論考です。同氏のご協力を得てここに転載させていただきます。

1. はじめに

登山史分科会で「登山史上の人々」というテーマについて話し合った際、幾人かの名があげられ、その中に小谷部全助の名があった。日本登山史上不世出のクライマーと謳われ、

一条の光芒を放って流星のように散った32年の短い生涯の中で、山へのエネルギーを支えた背景は何であったか、また「傍流登山家」と位置づけられるのはなぜか、それらが気になって文献や残された手紙などを検索し、その実像を追ってみることにした。

2. 部報『針葉樹』の報告文（注1）

小谷部全助を中心とした東京商科大一橋山岳部の最も輝かしい記録は、1935（昭和10）年から1937（昭和12）年に行われた山行であり、部報『針葉樹』八、十号に報

告されている。八号の中で、小谷部は形式に捉われた登山より個人の完成を優先すべきことを主張している。また、同号には「N君の遭難に係して」「錫文岳」という文があり、特に前者では1934年の鹿島槍で関わった三高山岳部員内藤況三の遭難事件を印象深く書いており、このときの心の傷が小谷部の飛躍のきっかけになったとされている。

九号には、北岳パットレスの第一次登攀として1935年12月の小谷部、鷹野雄一、小林重吉による第五、第三尾根の積雪期初登攀、第二次登攀として1937年1月の小谷部と森川眞三郎による第一、第四尾根の積雪期初登攀、続く3月の小谷部、森川による鹿島槍荒沢奥壁（北稜）の積雪期初登攀の研究報告がそれぞれ小谷部によって書かれ、自身の撮影した写真と共に記載された。これら登山史上に輝く記録の報告文を載せた九号は、貴重な文献であるとともに岳界に与えた影響は大きく、戦後まで多くのクライマーに聖典のように読み継がれた。同号で小谷部は当時国内におけるバリエーション・ルートに見切りをつけたとして、海外遠征の夢を追うあまり安易な登山に向かう傾向に対して警鐘を鳴らし、「吾々が今期の北岳パットレスに於て実際試みた方法は非常に将来性あり、且遠征に対する練習としても価値大なるものと信ずる



12月23日。雨。天所登山館に行き休む。仰山岳荷物に
 行更子あせし。道が悪い自動車が出ぬ為、梅井一夫を
 やり、馬一頭を全部載せ、雨の中をわづらひて下る。
 相後子も鹿島根尾根が好き。狩野とて、通むに、日の
 借いを得。明日の一次行は、狩野とて川上八吉とて、
 二人で行は、立教の湯津屋等が新雪の
 所、雨の好天気、幸これ、鹿島根を受るは相也。

12月24日。昨夜整理分割に苦を四人、解り、冷気、冷気
 とて、林近を行く、落葉林、林が、魁意、時、后、流、泉、附、以、
 残雪、非常、少く、十一月、即、も、枯、ろ、い、果、也。鹿島根の下部の
 一段、低、く、所、直、接、入、り、込、ん、登、り、初、め、の、河、江、も、
 天狗、鼻、の、尾、根、に、較、ぶ、と、道、が、楽、也。ち、何、人、も、通、つ、所、の、
 氣、を、付、け、知、り、踏、跡、も、有、り、位、也。次、部、に、残、雪、と、多、く、有、り、ワ、カ、を、
 付、け、登、り、上、方、一、次、取、下、尾、根、の、太、く、所、行、と、立、教、の、
 天、幕、跡、有、り、同、所、に、Camp、を、張、り、落、付、く、人、火、器、に、燃、火、

遭難事件を取り上げ、救出し得なかつた心の葛藤が小谷部をして日本有数の登攀者に成長させる要因になったと心の内面を分析している。不動の記録となった1937年1月の登攀については、『針葉樹』九号の報告をもとに記述している。

(2) 吉田二郎「小谷部全助ノート」(注3)

山に入れ込み始めた頃購読していた山岳雑誌に4回にわたって連載され、初めて小谷部全助の名を知った。執筆の吉田二郎は当時兼

足したばかりのRCC きての論客として知られ、山岳誌に「スーパリアルピニズム試論」を展開したが、後に記録の信憑性を疑われて岳界の表舞台から姿を消した人である。吉田自身は登山家論を心がけたとして、この中で、5つのキーポイントを読み取ることができ、第一は小谷部が時流的登山をクールの批判し、自らの登山を正統的立場に置くこととしたこと、その獨創性についてはドイツ

の名登山家ウエルツエンバッハに共通点を見出した。第二は小谷部の登山家として飛躍のきっかけになったのが三高部員の遭難事件だったことは、前項の佐谷の論文と同じである。第三として小谷部の華やかな登山を支えたものが実は地道で着実な努力の成果であり、時流に迎合しない獨創的で進取の気性に富んでいたこと。第四は集団としての登山に新しい分野を拓けたのは個人の力の集積であり、個性を重要視したこと。第五は静観的一面への考察がある。これは大島亮吉に内在した二つの志向と相通するものとし、『針葉樹』八号の山小屋欄に小谷部が書いた幾つかの短文を紹介している。

(3) 平島利規「クライマーの系譜第四回 小谷部全助」(注4)

執筆した平島は独標登高会に属し、戦後活躍した。小谷部と同期の望月達夫が所有していた当時未公開の山日記によって小谷部の足跡を追うとともに、望月、小林、日江井、大塚、佐々木誠といった小谷部、森川のかつての盟友たちとのインタビュで得た知られざるエピソードも織り交ぜている。小谷部の人物伝として位置づけられるものであり、資料や情報を提供した望月が「良く調査された記事」と評している。望月からの聴取をもとに、当時商大山岳部に登攀の指導者がなく、小谷

部の岩登りはほとんど独学で会得したと推論している。小谷部に後々まで影響を与えた鹿島槍の三高山岳部員遭難事件については、前項佐谷、吉田同様登山家としての成長過程に重要な意味を持つとして、山日記の記述を引用し遺体収容のイラストを載せている。山日記に1936年の立教パーティによるナンダ・コット初登頂のことが特記してあるのは、ヒマラヤへの関心が強かったことへの証左であろう。北岳パトレスや荒沢奥壁の詳細な記述も証言や山日記の内容が加えられて、生々しさが伝わってくる。

平島も小谷部の静観的一面を『針葉樹』八号のカクネ里単独行の記録から引用し、「小谷部の冒険者、彷徨者の資質が生来のものとするれば、彼の単独行の精神が当時としてきわだってユニークであったことも容易に肯定できよう」としている。最後に小谷部たちの足跡を追い更に歩を進めようとしたのは社会人山岳会の人々であり、やがてRCCの結成につながるかと結んでいる。付記として、小谷部のピッケルのことや山岳写真家としての一面を貴重な写真と共に紹介していることも特筆に値する。

4・追悼文・書簡文

(1) 望月達夫、「小谷部全助のこと」(注5)

小谷部と同期の盟友が綴った追悼文。この中で大規模な遠征に必要なサポート業務に未熟な部員が浮身をやつすより、一応の登攀技術を修得すべきという小谷部の持論が書かれている。リーダーとしてよくパーティを指導し、かつ自ら着実に困難な登攀へ挺身したと。また、それまでの商大山岳部に登攀技術を指導する人は僅少の状態で、小谷部が自力で切り開いたことを回想し、「君の登攀は、その一つ一つが創作であり、君の天才的な一面すら感ぜられないでもない」と記している。体力のあまり強くなかった望月をいつもかばった暖かい友情を述懐する。南アルプスで一人彷徨したときのことを望月宛の手紙の中で、「一人の南アルプスの旅こそ本当に山男の試練であり、又十分な満足を与えてくれるものです。」と書いている。小谷部が後進に残したものは登攀技術の間にも登山の本質的な考え方があったと述べている望月は、その一面の影響を受けてか戦後は静かな山々を遍歴し歩き続けた。登山年譜が付され、小谷部の山歴を知るには貴重な資料である。なお、本文は望月の著書など(注6、注7)にも収録された。

(2) 船本文治、「小谷部、森川両氏の年忌に憶う」(一)(二)(注8)

後輩の船本が小谷部の三十三回忌にあたって綴った文で、1941(昭和16)年から1945(昭和20)年にわたって療養中の小谷部、森川と交わした手紙を中心に追想している。冒頭、白峰三山を歩きながら小谷部、森川に想いをさせる一節は胸を打つ。また、吾妻山で恩師が二人を追憶して語るたびに船本は涙した、と書いている。1938年3月、森川と船本が前穂東壁(北壁)の積雪期初登攀を成し遂げるものの、二人とも手足にひどい凍傷を負う。このとき遅れて入山した小谷部が二人を救出する。そのときの労苦は想像を超えたものであつたらうし、励ましあつた三人の絆がいかに固く結ばれたことが、やがて肺結核に冒された森川、小谷部に続き、船本も罹患する。療養の床にあつて互いに手紙を交換し、励まし合った。1945年、戦局に合わせるように小谷部の病状は悪化の一途をたどり、終戦のあと11月に船本に送った手紙は絶望的な内容であり、12月森川と共に劇的な最期を遂げることになる。

(3) 望月達夫、小谷部、森川両君の手紙(一)(二)(注9)、「森川眞三郎君の手紙」(注10)

望月の受け取った手紙は1933(昭和8)年から望月が召集される1941(昭和16)年まで、小谷部が発病する前である。これら手紙の中に小谷部の本音が垣間見える。1

936年の手紙には当時厳しさからの逃避さ
え感じられる大学山岳部の墮落を打破したい
と述べ、山岳部にとって静観的思想は有害と
している。1938年の手紙では登山の安全
性について綴り、厳しい登攀に向かつてのび
のびとした成長を望む一方で、猪突すること
への戒めを書いている。森川、船本の凍傷の
跡を気遣う一方、自らは卒業後の就職先で休
暇も取れない激務の中で、山へ行けない憂さ
を好きな酒で晴らしているうち体は病魔に蝕
まれていったのではないだろうか。

森川の手紙は1936年のものであるが、
追悼文の中で望月は1947年復員して小谷
部、森川の死を人伝に初めて聞き、慟哭する。
「生前一本の綱を結び合って、北岳バットレス
や荒沢奥壁などの困難なルートを切り開いた
二人が、奇しくも同じ病で、同じ場所に、し
かも日を同じうして長逝したことは、まこと
に不思議な運命というほかはない。」と結んで
いる。

5. 小谷部自筆の『山日記』

市立大町山岳博物館には、小谷部全助の『山
日記』3冊（1934年6月～1935年5
月、1935年6月～1936年6月及び1
936年6月～1937年12月）が展示され
ている。この3冊によって小谷部が本格的に

登山活動を行った昭和9年～12年の記録が
ほぼ把握できる。ただし、1936年12月か
ら翌年3月の北岳バットレス及び荒沢奥壁に
おける不朽の記録はコースタイムのみ記入さ
れているが、おそらく『針葉樹』に正式報告
を書いているためであろう。むしろ1934
年頃の夏の南ア、中央アの縦走、剣岳周辺や
槍・穂高周辺の岩登りなどの記録は、冬の初
登攀へ向けて成長していく過程の様子が感じ
られて、その意味において貴重な記録である。
特に、1934年11月三高部員遭難に遭遇し
た「鹿島槍・荒沢より天狗尾根」の記録は印
象的に書いており、この事件が小谷部をして
飛躍へのきっかけになったとされる。『山日
記』全般にわたって、山行記録のほかコース
タイム、ルート図、概念図、登山歴、住所録
等が几帳面に書き留められている。小屋のス
タンブなどもあり、山行時には携帯し記帳し
ていたのだろう。

1936年8月、小谷部は先輩の吉沢一郎、
村尾金二に同伴して、鷲谷から薬師岳・槍ヶ
岳への縦走をしているが、そのときの状況を
『山日記』に書き残している。「小生は天幕、
石油、野菜等々で十貫匁余のリュックに汗た
らたらで暑いトロッコ途に先輩二人を追ふ。
眞川小舎に近くなつた頃沛然たる驟雨に会
い、クサツて出合附近のセメント置場の小舎

に飛び込み、雨の止まぬままにととう居す
はつて了ふ。小生腹痛。」先輩の後からボー
ター役の小谷部が汗にまみれて追う姿が想像
され、微笑ましくもある。この山行は小谷部
が北岳バットレスに注力していた頃で、その
合間に実施されたものであり、先輩たちへの
奉仕も忘れなかつたことを示している。

6. 論文・検証

前記の『山日記』を手懸りに柳澤昭夫がルー
トを实地踏査して、当時の登攀レベルがいかに
高かつたかを検証し、困難な登攀を実現で
きた技術の裏づけを論じると共に、厳しい状
況に対する適応や雪崩回避の情報収集につい
て考証している（注11）。この論文は登山史
へのアプローチとして、科学に裏付けられた
方法論から展開しようと試みたもので、新た
な視角からの研究といえる。この中で柳澤は
小谷部たちが凄まじい季節風の下、寒気、吹
雪、豪雪、雪庇、きのこ雪などの厳しい条件
下で荒沢奥壁（北稜）に挑み、実に30時間半
に及んだ壮絶な初登攀だったこと、アルプス
のアイガー北壁やグランドジョラスのウォー
カー・バットレスの初登攀（夏）より前に行
われた事実注目する。結論的には、「登山に
おける困難な課題を解決してきたのは基本的
には安全性を高める防御の力であろう。それ

は技術的には確保技術の展開であり、状況を判断する力や荒天の中で生き抜く生活の知恵であり、雪崩を回避する知恵である。」小谷部らにとつて全ての谷、尾根そして岩壁が未知であり、危険の対象となつたからこそ、アプローチで技術訓練し、状況判断力を養い、自分で経験を蓄積していったと論じている。

一橋山岳部の後輩である宗像充が、積雪期の荒沢奥壁を体験して書いた「荒沢奥壁の小谷部全助」という文がある(注12)。「彼と森川眞三郎が卓越したクライマーであつたことは疑う余地もない。当時の登攀具は、20メートルザイル2、ハンマー2、ピトン10、カラビナ4、捨縄1ですべてであり、むろんアイゼンに先爪はなく、確保は肩がらみ、落ちれば助からないほとんどフリーソロのクライミングである。」と現代でも困難なルートに対して、当時の貧弱な装備に触れている(注13)。「荒沢奥壁の初登成功の裏づけとなつたのは、『針葉樹』八号に収められた地域研究に見られるように、幾多の後立山、鹿島槍への山行の積み重ねによる集大成と論じている。更に、「小谷部の念頭には来るべきヒマラヤ遠征があつたはず」とし、「登山界の中で自分と一橋山岳部が置かれた状況を適切に認識し、それに甘んじるだけでなく、アルピニズムの末流を自称するだけ謙虚な野心家である」と

もに、自己の果たすべき役割を創造する事のできる将来を見据えた実務家であつた」と論じ、そのような小谷部の態度に共鳴している。

7. 登山史・自伝から

登山史に取り組んだ人々は、歴史の流れの中で小谷部たちの業績をどのように捉えているだろうか。大衆に読まれることに視線をおいて近代登山史をまとめ上げた安川茂雄は、その著書(注14)の中で、東京商大山岳部の創立は1922(大正11)年に遡るが、アルピニズムの追及を始めたのは1934(昭和9)年頃からであり、「その主役が小谷部全助で、日本の生んだ代表的なクライマーといえる存在だ」とし、「おそらく昭和9年より12年までの4年間、小谷部全助を中核とした東商大山岳部の荒沢、北岳バットレス、前穂東面に示した攻撃は、彼の存在なくしては考えられない意欲的なタクティックであつた」と小谷部の位置づけをしている。

1932年頃から始まつた学校山岳部による積雪期バリエーションルートへの挑戦のうねりは一段落したかのように見え、1936年の立大ナンダ・コート初登頂が成功するや、登山界の潮流は海外遠征へと流れた。これに反旗を翻した代表が小谷部たちであつた。その経緯について、岩壁登攀という局面から初

めて登山史を著した斎藤一男は、その著作(注15)の序文で次のように書いている。「国内のバリエーション・ルートの核心部が終末に近い様相を察知した人びとは、海外遠征の夢にとりつかれ、猫も杓子もヒマラヤへ酔いしれた。しかし、すでに色あせた日本のなかで、いかにしてアルピニズムを推進して行くべきかの命題と四つに取り組んだ闘將に、東京商大の逸材、小谷部全助、森川眞三郎らがいた。彼らは登山の内容、登山の方法、あるいは登攀の規模を表面に押し出し、極地法を採り入れた迂回ルートにより、積雪期の北岳バットレス、荒沢奥壁をかちとつた。」

先輩の吉沢は自伝的なその著書(注16)で、「われわれの山岳部において、いわゆる登山史に記録されるような技術的な黄金時代は、私より十年あとで入部した、小谷部全助、望月達夫、森川眞三郎その他の活躍を待つ必要があつた。彼らは鹿島槍北壁、北岳バットレス、荒沢奥壁積雪期などで、睥睨すべき登攀を行ない、東京商大山岳部の歴史において華々しい一時期を展開してくれたのである。」と小谷部たち先輩の功績を認めている。

8. 書評・書誌から

生涯を登山史研究に捧げたと言っても過言ではない山崎安治は、その著『山の序曲』(注

17)の中の第二部「学校山岳部の部報」で、『針葉樹』は、昭和14年発行の第十号で戦前分を終わっているが、とくに第八号、九号と小谷部全助、望月達夫などというすぐれたクライマーたちの活躍のあとは、前穂高東面、北岳パットレス、鹿島槍沢奥壁にしろされ、日本の登山史上に新しい記録をつぎつぎに書き加えていった。第十号の前穂高東壁の積雪期初登攀と、凍傷の事故、それに対する反省など凄まじい内容である。」と書いている。

この『針葉樹』第十号に対し、東京農大OBの織内信彦が書評(注18)で、「小谷部全助氏の志を継いで、今は数少いバリエーションルートの眞摯な追求に専心してゐる姿が全面的に伝えられてゐる。(中略)の中にはなんらの妥協も退嬰もみいだされない。攻撃精神に充満してゐる。且ての早大に依つて行はれた積雪季の滝谷程の組織化された華やかさはないにしても、十分好感の持てる山との戦闘記録であるといふことが出来よう。」と賞賛しながらも、「12月の雪崩遭難は当時の状況から推してみると、冬雪崩回避の鉄則を無視した感多く、功に逸つて機を逃したもので戒心の要あるべく同時に一般の雪崩に対する注意再喚起の意味での警告に値するであらう。」と厳しい。当時行われた周辺の外地遠征を低回的旅行主義と批判し、それに反動的に発し

た對抗主義で内地の激しい登攀対象を求めていった一橋山岳部が、「それだけに、ムキになって登つてゐるといった傾向が何かと現われてゐるのではないだらうか」とし、登攀中にピッケルを落としたり、ツェルトザックを落とししたことに触れて、「読んでゐてもハラハラさせられる。読者の心境を完全に登攀者(原著者)の一喜一憂にまで惹きずつて行つたのだとしたら、それは作者の達文の然らしむるところと言えるだらうが、私はむしろ過飽和の状況にあるこの人達の登山方法にハラハラさせられるのである。」極限に近い登攀ほどリスクはまわりつく。織内の感想には異論があるかもしれない。なぜなら彼らは敢えてより困難な登攀に挑み、その代償を払つたが初登攀を成し遂げ、そして生還しているのである。

9. 追悼文・その他

小谷部は1939(昭和14)年1月、兵役入隊に際し胸部の微患が発見される。同年4月、日本山岳会に入会するが、同会機関紙(注19)に戦死した盟友鷹野の追悼文を寄稿している(鷹野は山岳部歴では1年後輩で、1937年に日本山岳会に入会している)。「私自身の所謂アルピニズムの目覚めとでも云ふべき気分は、彼との登行で培はれたと言つても

過言ではない」ほどの間柄であった。この文で小谷部はこんなことを書いている。「統制乃至は制約と言ふ言葉に関連して山登りを見る時、縦横の方向共に大体三つの傾向を抽出し得ると思ふ。その一は心の赴く俣好きな様に歩いた言はば無統制、自由主義時代、次が進歩的態度を表明して所謂アルピニズムに向つけられた稍々自縄自縛な内部統制時代、最後は特別なものだが今日の戦時体制に於けるが如き外部からの強い統制をつけた行き方としてゐる。鷹野は1936年3月卒業し、4月小谷部は山岳部代表委員になつてゐる。以後、小谷部たちは1937年まで北岳パットレスや荒沢奥壁に不朽の記録を残すことになるが、この時代は小谷部の言つ「アルピニズムに方向づけられた稍々自縄自縛な内部統制時代」だったのだらうか。国内における登山界の行き詰まりを形式主義で打破しようとする外地遠征を批判する旗頭として、反骨精神を掲げた自己の主張に邁進し、自らを律していく厳しさをそこに感じるのである。

他に、小谷部は雑誌に雪中露營の目的化や安易な登山方法への痛烈な批判を述べたり(注20)、1936年5月荒沢奥壁の記録の報告(注21)を寄稿している。

10・写真家としての小谷部

盟友望月の文(注22)で、「君はまた写真をよくした。もって来たカメラはむしろ旧式のものだったが、そんな事には頓着なく多くの秀作を残した。その主なものは、『針葉樹』、『ケルン』、『氷雪に挑む』(朝日新聞社編)、『高山深谷第十輯』などに収載されたが、未発表のものでまだ良いものが相当にある。」と書いている。また、安川も著書(注14)で、「針葉樹』九号の口絵写真に注目し、「同号の北岳



北岳バットレス第4尾根のマッチ箱でのアップザイレン
(小谷部撮影)

バットレスの口絵写真はクライマーである以上に、アーティストとしての小谷部の才能をいかんなく発揮しており、のちに朝日新聞社刊の写真集『氷雪に挑む』に転載されたほどの迫力のある作品だった。」と評している。この写真集に載った小谷部の5葉の写真は、登山時の臨場感ある迫力が読者を魅了した。『山日記』の巻末に「山岳写真要項」という頁があり、データにマークが見られるのも小谷部が写真に関心を持っていた一端を示している。

る。

11・ロマンチスト小谷部

同じく望月の文(注22)で、「父君全一郎氏の血を享けた君には、彷徨者のやうに唯一人困難な山にわけ入ってその法悦境を愉しむといった半面が多分にあった。」と書いている。小谷部自身も『針葉樹』八号の(山小屋)欄に愛称「スケ」の名で、「私はあらゆる時、あらゆる山に登って、しかも静観詩人の様に悠々とした心で、じっくりと山を味わい度なのだ。」と書いている。因みに、父全一郎は成吉思汗は義経なり』の著者であり、明治年間に北海道、千島など放浪の旅をしたり、苦勞して渡米しエール大学を卒業した人である(注23)。

小谷部が『山日記』の中に15首ほどの歌を書きつけている。荒天時、停滞のとき詠んだものだろう。歌の巧拙は分からないが、少なくともわれわれ山やに響くものがあり、ロマンチスト小谷部を感じさせる。いくつかを紹介する。

・つつせみの世はさまざまに遷れども永久とわ(に)変わらぬ山ぞ嬉しき(北岳御池小舎)
・目覚むればわびしき秋の草枕はかなき夢の名残かなしも(同)

・粉雪の舞飛ぶ峯を打仰ぎ足なえし身を天幕

に横たふ（奥又白谷に足病みて）

・天幕にラディウスの音ひびく頃眞白き吹雪外をつつめる（鹿島槍、雪山の天幕にて）

・吾が天幕雪ふかぶかと埋もれぬ里を忘れし深山の尾根に（C にて）

12 病床での小谷部

いま筆者の手元に3通の手紙（注24）がある。小谷部が富士見高原に療養生活を送っていたとき、同じ病床で当時療養されていた京都の柳田？という方が平成2年望月に宛てたものである。面識がなく、語り合うこともなかったようだが、「私の見た小谷部さんは、黒ねずみ色のセルの寝巻を着て、いつも寝ているか、時にヴェランダに唯立って、八ヶ岳の方を見ている姿でした。」という印象だけを書いている。病床にあった「あをぞら句会」という俳句のグループに小谷部が入っていたようであり、当時の俳句ノートのコピーが同封されていた。いくつかのものか分からないが、その中に 岳人の号で小谷部の句が一首あった。

われが死も草萌ゆる頃か

八岳淡し

岳人

船本に宛てた最後の手紙（昭和20年11月22日付）では、高熱が続いて絶望的な内容だった。おそらくこの頃の句ではないだろう

か。死を覚悟した小谷部が一句に託した思いが伝わって胸がつまる。各句に対して同人たちの短評が書き添えられているが、その中に小谷部の心情を代弁するような文があったので紹介する。此頃の様に八ツが淡く淡く霞むで居る野に立って見ると全くこの句の様な感が深い。ほんのりと雪を残して霞の奥に立ってゐる八ツに対してゐると時には自分の眼が霞むでゐるのではないかと云ふ様な錯覚や己が魂が羽化登仙してゆく様な錯覚すら覚える。目をみはってもみはっても模糊として霞の奥の奥に立ってゐる八ツは何か死への誘惑とも思へる。（竜）

13 その人物像について

文献や資料を探索するうち、小谷部の実像が見えてきたので、整理してみた。

（1）当時の時代背景は、2・26事件、日中戦争と軍部ファシズムへの途を進んだが、まだ登山活動への統制は少なかった。1931年頃から活発化した学校山岳部を中心とする積雪期バリエーションルートへの挑戦が一段落し、1936年の立大によるナンダ・コート初登頂をきっかけに、千島、朝鮮、満蒙などへの遠征傾向が本来のアルピニズムから離れ、一方極地法や雪中露營そのものが目的化する傾向への警鐘を鳴らしたが、自身

は極地法を活用して迂回ルートから困難な最終目標をアタックするという創意工夫を行った。「海外遠征のままならぬ憂さをかすかに晴らす」と本音を書いており、鹿島槍や穂高構想（未実施）にみるこの方法はヒマラヤを見据えたシミュレーションだったとも考えられる。

（2）個体（すなわち個人の登攀能力）の完成こそ優先すべきであり、集団としてのシステマティックな有機的行動は結果として醸成されるとした考え方は、小谷部が当時岳界をリードしていた学校山岳部のあり方について主張したもののだが、これは戦後アルピニズムを担って活躍した社会人登山家たちに受け継がれていく思潮であり、先見性であったといえよう。

（3）岩登りは毎日やりたいと言いながら、一度三ツ峠へ練習に行つてはいるものの、いわゆるトレーニング山行はほとんどない。当時の情勢や学業という制約の中で、知識的には岩登りの技術書や訳本などを讀んだであろうし、積雪期登攀技術に至ってはやはり独学で会得し、冬季外に実地踏査による地域研究を行いながら、実践技術を蓄積したものと思われる。雪崩の知識については、すでに慶大の大島亮吉、早大の藤田信道などの文献（注25）が発表されており、小谷部たちの目がこ

れらに触れ、雪崩対策をしていたことは想像できる（1937年奥又白で森川らの先発隊が雪崩の洗礼を受けてはいるが……）。

（4）一橋山岳部を支えたエネルギーは、友情に厚く、後輩への思いやりと後進の指導に熱心だった中核の小谷部のカリスマ性に根ざした影響が大きかった。奥又白で起こった三つのアクシデント、すなわち1936年11月小谷部の松高ルンゼでの負傷（森川が搬出支援）、1937年12月松高ルンゼでの表層雪崩の遭遇（森川の埋没からの救出と日江井の負傷による搬出）、1938年3月森川、船本の前穂東壁登攀での凍傷（遅れて入山の小谷部が救出）では、すべてが仲間によるセルフレスキューであった。アクシデントの是非はともかく、これらの救出劇に見られるように彼らは強固な絆で結ばれた少数精鋭の集団であり、その中心に小谷部が存在した。

（5）小谷部個人に同居したアルピニズムとロマンチズム、先鋭的登攀精神と静観的思想は一見矛盾を感じさせるが、『針葉樹』八号に書いたカクネ里へ一人入ったときの一節を読めば、その内的志向が理解できる。「マンメリー主義もそのみならば私にとっては技術の進歩、征服欲の満足以外大して価値のあるものとは思はない。私の終局の理想としてあげられるのはカンチエンジュンガでもない、

エベレストでもない。あらゆる山々に一人喰入って尚且自然の嘯きに思ふ様胸を躍らせ得る山岳詩人の心境になりたい事なのだ。」『山日記』にもその本音とも思える気持ちを書いている。「生命を賭すクライムを経て後、到達する大らかな静観的な心境こそ尊いのではないだろうか」と。

おわりに

もし小谷部が健在ならば時代の変化を背景にどのような活動を展開し、戦後の登山界にどのような影響を与えただろうか。斎藤は前記の著書（注15）の中で、小谷部、森川の死について「惜しみても余りある人材の喪失であった。」と嘆じ、吉沢は著書（注16）で、「今まで生きておれば海外登山の一度や二度は出掛けており、8000メートル峰や巨壁の登攀でその名を世界に轟かせていたに違いない人物であった。」と回想している。

とかく組織を背景にした多数派が主流とされ、「個」を主体とした少数派が傍流とされて、時には異端（アウトサイダー）と呼ばれる。小谷部は集団的傾向の優先によって主流が本来のアルピニズムから離れてゆくのを危惧し、「個」の登攀能力こそ最も登山者に重要であるとして、むしろ潮流を正統化しようと主張し実践した信念の人だった。その後の登

山界の流れを見れば、その思想は主流とか傍流とかを超越した普遍性さえ感じさせるのである。

本稿をまとめるにあたって、『山日記』3冊の全頁コピーを提供いただいた市立大町山岳博物館の関悟志学芸員（当時）と、「ご理解いただいた柳澤昭夫館長に深く感謝致します。」

また、写真の掲載を快く承諾下さった生田正子氏（小谷部全助氏の姪）、写真集『氷雪に挑む』を寄贈いただき、諸資料を提供下さった斎藤一男会長、療養生活時代を知る上で貴重な手紙を提供下さった西本武志副会長に感謝致します。

（文中敬称は省略させて戴きました。また引用文はできるだけ同じ仮名遣いにしましたが、漢字は常用漢字に改めました。）

（注1）『針葉樹』八号（1935年）、九号（1937年）、十号（1939年）

（注2）『岳人』23号（中部日本新聞社出版局、1950年）

（注3）『山と溪谷』239、242号（山と溪谷社、1959年）

（注4）『クライミング・ジャーナル』4号（白山書房、1983年）

（注5）『山岳』44年2号（日本山岳会、1949

年)

- (注6)『忘れ得ぬ山の人びと』(茗溪堂、1986年)
- (注7)『現代登山全集』(第1巻「日本の山と人」、創元社、1961年)
- (注8)『針葉樹会報』復刊49、50号(1977年)
- (注9)『針葉樹会報』復刊59、60号(1981年)
- (注10)『針葉樹会報』復刊9号(1961年)
- (注11)『山と博物館』50巻7、8号(市立大町山岳博物館、2005年)
- (注12)『山』675号(日本山岳会、2001年)
- (注13)因みに、1937年1月の北岳ハットレスにおける登攀具は、30メートルザイル1、20メートルザイル1、20メートル補助ロープ1、ロックピトン約10、アイスハーケン3、カラビナ4、ハンマー2であった(『針葉樹』9号)。
- (注14)『増補・近代日本登山史』(四季書館、1976年、オリジナールはあかね書房版、1965年)
- (注15)『岩と人 日本岩壁登攀史』(東京新聞出版局、1980年)
- (注16)『山へ わが登高記』(文藝春秋社、1980年)
- (注17)『山の序曲』(朋文堂新社、1967年)
- (注18)『山小屋』95号(朋文堂、1939年)
- (注19)『山岳』36年1号(日本山岳会、1941年、同会報『山』102号にも追悼文を書いて

いる)

- (注20)『山小屋』96号(朋文堂、1940年)
- (注21)『ケルン』59号(朋文堂、1938年)
- (注22)『山岳』44年2号(日本山岳会、1949年、前出)
- (注23)父全一郎氏はアイヌ救済を志し、それが義経「ジンギスカン」説を唱える機縁となった。他に「古代日本人」へ「ブライ」説も主唱し、本を出している。
- (注24)手紙は西本武志氏が偶然入手されたもの(1990年2月、4月付け)
- (注25)遺稿集『山 研究と随想』(岩波書店、1930年)、『積雪期登山 準備と技術』(朋文堂、1933年)
- すなだ・さだお
- 1939年東京生まれ。99年まで(株)トキメック(旧東京計器)に勤務、同社山岳部OB(事務局)。芝浦工大機械工学科卒。副業として工業高校非常勤講師を6年務める。東京都山岳連盟常務理事・指導教育委員長、同総務部長、日本山岳協会指導常任委員を歴任、登山教室・スクールの講師、派遣講師のほか公認指導者養成事業に10年間関与。国内外の山岳・岩場ルートを季節問わず遍歴、最近は藪山やインドアを含めマルチに山を楽しむ。

日本体育協会公認山岳上級コーチ、日本山岳協会公認自然保護指導員、日本山岳会会員、日本山岳文化学会理事。

杉原 此下寧た此申越有難う。左記の事も確定しなす一も既に
 送附済みなり。教念の徳波根據に致しなすから麻袋は不要なり
 1/30 夜州大改定(右前分) 同打の村尾先輩を本日東京迄と思ふ
 原島々ー江波ー上島地
 1/1 上島地ー徳波
 2/2 5. 舟一予定ー本谷より北徳島
 3/3 5. 舟一予定ー 國政より奥徳島にマカトルム
 4/4 徳波味越えー島々ー松本
 勤務の關係にさう長くも休めず 破念作らざる程なす我儘しなすか今
 1/25 以上大に強切る白山等の未登地プランの胸を躍らざる次第
 新採別簿 宗を深山の古針きき強り南をさす中々ありませぬ
 何れ又の機會を待たせしむる。 正は名此礼部報告まで

全行予定
 村尾女
 船本
 外一名(徳波山岳会員)

小谷部全助の八ガキ(日本山岳会蔵)